
私がなぜ現在の科目を選んだか

「呼吸器・感染症・アレルギー内科」

信州大学医学部内科学第一教室

市山 崇 史

私に1回でも会った事がある方には信じられないかもしれませんが、子供の時は非常に病弱でした。頻繁に風邪をひき、夜せえせえして眠れず、かかりつけの診療所に頻回に通院していました。喘息といわれ、苦しくなるたびに薬をもらいました。大人になったら自分と同じようにせえせえ苦しんでいる人を楽にできる仕事をしたいと、10歳頃から医師を志しました。信州大学に入学し、喘息を診ている診療科は呼吸器内科(第一内科)だということで、4年の臨床実習の頃に入局宣言をしました。入学試験の面接官が久保惠嗣前教授だった事にも縁を感じていました。「小児喘息だったのに小児科ではないのですか?」「診療所にかかっていたという事は、将来は開業するのですか?」と言われると、今でも市中病院の救急当直で小児患者さんを診るのはとても好きですし、大学病院で呼吸器

内科専門の先生に診てもらった事は1度もないのですが、ずっと呼吸器内科医になるんだという気持ちで国家試験に合格しました。

新臨床研修制度になって、学生実習と異なり、医師として様々な診療科で研修を受けて、「どこの臓器であれ、手段が薬なのか手術なのか言葉なのかは問わず、何らかの症状で困っている患者さんの状態を、様々な情報に基づいて明らかにし、介入する事で少しでも楽な方向に導いていく行為は臨床医として共通したものである」と感じました。どの診療科も非常に興味深かったのですが、医師になろうと思ったきっかけが「子供の時に呼吸困難で嫌な思いをして、それを楽にしてもらった事」だったので、初志貫徹し呼吸器内科医になりました。

それから10年経った今、子供の時から負けず嫌いだったため、呼吸器に関わる病態および症状に対して「よくわかりません」とは絶対に言いたくないので、呼吸と名の付く事に関して新しい情報をどんどん取り入れ、現場に還元する臨床医であり続けたいと日々の診療に従事しています。(信大平18年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

「分子病理学」

信州大学大学院医学系研究科分子病理学教室

川久保 雅友

私が博士課程進学を考えていたころは、遺伝子研究が最盛期でした。当時細菌学講座の寺脇先生より分子生物学の講義を受け、その頃はよくあることでしたが、“遺伝子が解れば生命現象のすべてが解る”的な発想に染まったものでした。そして遺伝子に関係した研究がしたいとの思いから、同講座に進学し、そこで現在の研究にも繋がる様々なことを教えて頂きました。

途中、動物を用いた免疫学的研究に従事しましたが、その後臨床検査部教授勝山先生にハイルマーニ菌の研究に誘って頂きました。ハイルマーニ菌は胃癌の原因菌であるピロリ菌の仲間です。感染してもピロリ菌のような胃炎を呈さないため、保菌者がみつきりにくい感染症です。ピロリ菌、ハイルマーニ菌のようにヒトの胃内に持続的に感染する細菌は、ヘリコバクター属以外では見つかっていません。

ヒトの胃は蛋白質を分解するための臓器でありながら、自身は消化されないという相反する機能を持っています。その内部環境は胃酸・蛋白分解酵素によって生物が住めるような世界とは想像も出来ません。そのような限界環境で生息する細菌と胃粘膜の機能・構造にはとても深い興味を抱きました。幸いにも本学では勝山 努前病態解析診断学教授、太田浩良生体情報検査学教授、中山 淳分子病理学教室教授らの先生方が、この機構の一端を解明していたという恵まれた背景にありましたので、私も胃粘液とピロリ菌、ハイルマーニ菌の謎の解明に一役かってこられました。

ピロリ菌感染患者は我が国では徐々に減ってきていますが、ハイルマーニ菌のような非ピロリ菌ヘリコバクター属菌種によるヒトの胃への感染は減っていません。むしろ種類としては増えていることを最近みだしました。胃粘液に含まれる糖鎖の意義についても私たちの教室の研究によって解明されつつあります。また私自身もポストゲノムの潮流にのり胃粘膜に発現するmiRNAへと最近対象を広げつつあります。私の研究の対象も興味もまだまだ尽きることはありません。

(信大大学院昭63年卒)